

若年運転者の交通事故・違反の特質とその意識特性に関する研究（昭和 62 年度）

人身事故全体の約 30%を占め、しかも死亡事故の発生率の高い若年ドライバーに注目して、彼らの起こす事故の特質とその高い事故率の背景要因を明らかにすることを目的として、事故分析、アンケート調査を行った。

- ① 昭和 61 年中の一般道路での男性による交通事故（第 1 当事者）42 万件を集計分析した結果、発生時間は夜間・早朝の土・日曜日が多く、事故類型では追突が多い。行動類型では直進加速時に多く、人的要因では脇見が多い。道路形状は単路が多いが、カーブでは自動二輪車の事故が多く、若年層で 30%にも達している。
- ② 指定自動車教習所を卒業して免許取得後 1 年経過した者 6,000 人にアンケートを実施し（回収率 69%）、若年ドライバー（16～24 歳）の事故の背景にある心理的要因の中から、攻撃性、非協調性、衝撃性、自己顕示性等を意識・態度の側面から把握した。攻撃的な運転態度は、若年ドライバーに特徴的であり、二輪の年少ドライバー（16～19 歳）に顕著である（図）。事故・違反群のドライバーは、攻撃的な運転態度が強く、走行中のコンフリクトを持ち易いといえる。若年者は排他的で、非協調的な意識・態度を示す者が多くみられ、四輪群では、歩行者や自転車を邪魔にする者が多く、二輪群では、横道から出たそうにしている車に進路を譲ることに抵抗がみられるようである。信号待ちや渋滞時、遅い車への追従、自分の進路を妨げる場面を想定した設問で、若年層は衝動的な傾向が現れ、中でも二輪群に特徴的である。
- ③ 自己顕示的な運転態度は、若年者に極めて特徴的に現れており、特に年少ドライバーでは、並進してきた車に対する競争意識が特徴である。若年層のうち四輪群においては、事故・違反群に自己顕示的な運転態度が現れているが、二輪群は、無事故・無違反群でも事故・違反群に近い意識・態度がみられるようである。若年者は、「スピードの快感」に酔う傾向が極めて強く現れており、自信過剰な傾向も顕著である。特に、二輪群に「スピードの快感」と「運転能力の限界」に特徴がみられる。
- ④ 若年ドライバーには危険性を過少評価する傾向がみられ、特に二輪群の危険意識は低い。若年者は、友達や仲間が一緒のときは、かっこよく運転したいと考えており、そのときはついスピードを出してしまうと応答している。また、車を友達づきあいの要として考えていることも大きな特徴である。二輪群、特に年少者にその傾向が顕著であり、事故・違反群に上記の傾向が顕著に現れている。若年者は、車の付加的な価値を重視する傾向があり、特に二輪群に顕著である。二輪群の中でも年少者は、「カーブでタイヤをきませながら走る」「人より速く走れる技術を身につけたい」「高性能車に乗りたい」の三点に特徴がみられた。二輪群および四輪群ともに事故・違反群に特徴的なものが、「車の運転はうまい方だ」と考えている者が多い点である。

図 攻撃的運転態度に関する応答結果（二輪群）

